



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Literary Fathers and Sons : Charles Dickens, Mark Twain, Sherwood Anderson, and Paul Auster [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	一瀬, 真平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15581号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90238
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Shimpei_Ichinose_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：一瀬 真平

学位論文題名

Literary Fathers and Sons:

Charles Dickens, Mark Twain, Sherwood Anderson, and Paul Auster

(文学的父子：チャールズ・ディケンズ、マーク・トウェイン、
シャーウッド・アンダソン、ポール・オースター)

・本論文の観点と方法

本論文は、19世紀イギリス文学を代表する作家チャールズ・ディケンズからアメリカ文学の巨匠マーク・トウェインが受けた影響を様々な歴史的資料の発掘とともに実証的に解明し、さらにトウェインがディケンズに対して抱いた尊敬と対抗心という両面価値的な関係と同様なものとして、20世紀アメリカ文学における重要な作家シャーウッド・アンダソンが、現在も執筆活動を続けるアメリカ作家ポール・オースターに与えた影響を再び様々な歴史的資料とテキストの読解により考察・検証するものである。

方法としては、アメリカの文学研究者ハロルド・ブルームによる影響に関する議論、すなわち、先行作家と後発作家の関係をオイディプス神話におけるライオスとオイディプスになぞらえ、後発作家が先行作家に対して抱く影響の不安を明らかにした研究を参照枠としながら、四名の作家たちがそれぞれ直接あるいは間接的に関係していた同時代の思想や文学的知識の検討、歴史的文脈の把握、および丹念なテキスト読解をとおして、各作家の作品の中に父親的存在に対する両面価値的な態度を見だし、その意義を分析している。同時に、これまでの研究においててなされている各作家が受けた先行作家に関する主要な議論を十分に踏まえつつ、上記のオイディプス的な後発作家の不安を検討することで、各作家の特質を新たに解明・評価することを試みている。

・本論文の内容

本論文は5章から成り、前半の三つの章においては、ディケンズとトウェインがともに抱いていた実父に対する敵対的な感情を抑圧しつつも、それぞれの作品においてはオイディプス的な主題がともに非常に似通った設定や挿話として隠しがたく表出していることを詳細に明らかにし、後半の二つの章においては、アンダソンとオースターがともに抱いていたクリストファー・コロンブスに対する複雑な関心が、両作家の作品においてフロンティアの主題として描かれていることを明らかにすることで、アンダソンこそがオースターが抑圧し続けた文学的父であることを解明し、四名の作家において父親的存在に対するアンビ

バレントな心性がその核心にあったと結論する。

第1章では、ディケンズとその愛読者であったトウェインがそれぞれ抱えていたトラウマ的体験が両者ともに父親に関する似通った出来事であったことを様々な先行研究を元にしつつ確認する。これまで批評的な関心が寄せられてこなかったこの一致に注目することで、ディケンズの作品や伝記がトウェインにとって特別な存在であった可能性があることを主張する。実際、トウェインはまるでトラウマを反復強迫するかのようにディケンズのオイディプス的な場面や挿話に繰り返し引きつけられていたのである。その具体的な例を、ディケンズの『二都物語』とトウェインの『トム・ソーヤーの冒険』、さらに『大いなる遺産』と『ハックルベリー・フィンの冒険』を比較検討することであぶり出していく。

第2章は、トウェインの南北戦争における体験を元に、『大いなる遺産』と『ハックルベリー・フィンの冒険』における共通する挿話や設定の意義を議論する。南北戦争初期、戦争の渦中にいたトウェインが雑誌『ハーパーズ・ウィークリー』誌上で『大いなる遺産』の連載を読むとともに、自分の戦争経験に関わる記事をも読んでいたことが、史料の発掘によって実証できるのである。それらは、南北戦争中にトウェインが滞在したイリノイ州ケイロに関する記事であり、さらにはトウェインがその付近で参加したミズーリ州の最初の戦いに関する記事である。それらの記事を『大いなる遺産』の連載と同時に読んだ経験が『ハックルベリー・フィンの冒険』の重要な挿話、すなわち、ミシシッピ川とオハイオ川が形作るオイディプス的な三叉路の挿話を生んだと主張する。

第3章は、まずディケンズの短編「チャールズ2世の時代の牢獄で発見された告白書」を、作家と父の関係の視点から再評価する。作品内容とその舞台となっている時代の史実との接点を見出しつつ、最終的にはロンドンの靴墨工場でディケンズが子供時代に経験した苦い記憶と、それを告白することへの葛藤が、この短編に表れていることを明らかにする。ついで、『大いなる遺産』が、南北戦争中に北部の政治雑誌ともいえる『ハーパーズ・ウィークリー』に連載されていたことから、この作品に、北部寄りで反南部（反連合国）的な要素が潜んでいたこと、すなわち父としての連合国に逆らう子としての米国北部という主題が隠されていたことを指摘する。

第4章は、オースターの『ムーン・パレス』がアンダソンの作品から受けた影響を考察する。アンダソンが作品の題材としていた歴史上の人物、すなわち発明家のニコラ・テスラや画家ラルフ・アルバート・ブレイクロックに関する挿話が『ムーン・パレス』に差し挟まれ、さらに両作家の作品の中でこれらの人物が「フロンティア」という一つのテーマとともに描かれていることを指摘する。これまでオースターが影響を受けた作家としては批評的な関心を逃れていたアンダソンこそが、オースターが抑圧し続けた文学的な父であったのであり、それゆえに『ムーン・パレス』は一種の父殺しの物語になっているのである。

第5章は、アンダソンの短編集『卵の勝利』が発表された20世紀初頭においてコロンプス賛美の社会的風潮があったことを指摘し、この作品におけるコロンプスに対する批判的な視点が、中西部における同時期のアメリカ・インディアン協会(Society of American

Indians) の活動の影響を受けていたことを考察する。アンダソンが抱えていた先住民に対する罪の意識とは、裏返せば、アメリカの「父」としてのコロンブスに対する敵対心だったのであり、この点にオースターは反応して彼自身の父殺しの物語をコロンブスの表象とともに描くことになったのである。

結論部では、親子関係が偶然の産物であることから、作家間の「親子」関係に敏感だった各作家たちが偶然の主題にも魅了されていたことに触れ、本論文の論じてきた影響関係が必ずしも作家の意図に支配された上下関係とは限らないとし、独断的な主張にならないように配慮している。最終的にはアンダソンやオースターが描いた卵の表象を挙げ、父の子の関係が循環的あるは双方向的なものであることを指摘して、結びとする。